

琉球大学学術リポジトリ

在来治療師の知識の評価に関する知識人類学的研究：
鹿児島県与論島を中心とするユタ・ヤブなどの事例
研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2020-10-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Salatkiewicz, Michal Mateusz メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/47026

目次 (注記：本要約に該当する部分を下線で示す)

第1章 問題所在と研究目的

- 1 はじめに
- 2 本研究の射程
- 3 知識社会学について
 - 3-1 ヨーロッパにおける知識社会学
 - 3-2 アメリカにおける知識社会学
- 4 知識人類学について
 - 4-1 日本における知識人類学的な研究
 - 4-2 西洋における知識人類学的な研究
- 5 「ユタ」の発生と「ユタ研究」
 - 5-1 「ユタ」とその発生をめぐって
 - 5-2 「ユタ研究」について
- 6 人類学における存在論的転回
- 7 「ユタ研究」と知識人類学
- 8 用語について
- 9 本研究の目的
- 10 調査方法
- 11 小括

第2章 先行研究による琉球弧の治療の概観

- 1 治療師について
 - 1-1 ユタ
 - 1-1-1 ユタの資質
 - 1-1-2 ユタの病理観
 - 1-1-3 成巫過程
 - 1-2 ヤブー
 - 1-2-1 ヤブーとしての資質とその病理観
 - 1-2-2 診断と治療
 - 1-2-3 ヤブー成立の要件と知識の伝承・獲得
 - 1-3 ユタとヤブーとの関係

1-3-1 職掌分担

1-3-2 呼称について

1-4 他の専門家

1-4-1 ムヌス

1-4-2 カッティ

1-4-3 サンジンソウ・スムチー・ウグワンサー

2 琉球弧における治療法 その分類について

2-1 物理的治療

2-1-1 瀉血

2-1-2 灸

2-1-3 鍼

2-1-4 指圧・平手打ち・入れ墨

2-2 呪術的治療

2-3 動植物・鉱産物による治療

2-3-1 薬草治療

2-3-2 その他

3 小括

第3章 在来医療の存続 鹿児島県与論島を中心に

1 与論島について

1-1 主な概要

1-2 与論島の植物と治療について

1-3 宗教施設の概況

2 キー・インフォーマントとなるAさんの紹介

2-1 主な紹介 ライフヒストリー

2-2 超自然的な能力と霊的活動

2-3 治療的知識と活動領域

2-4 筆者自身の問題へのアプローチ 健康・生活・スピリチュアル

2-5 「ユタ」・「ヤブ」について その呼称と意味について

3 Aさんの薬草的知識について

4 小括

第4章 「ユタ」・「ヤブ」の「作り方」

1 評価の問題について

2 実地調査による事例の分析

- 2-1 事例① Mさん
- 2-2 事例② Nさん
- 2-3 事例③ Sさん
- 2-4 事例④ Rさん
- 2-5 事例⑤ Oさん
- 2-6 事例⑥ Iさん
- 2-7 事例⑦ Tさん
- 2-8 事例⑧ Gさん
- 3 電子メールとインターネット上での調査による分析
 - 3-1 事例⑨ Eさん
 - 3-2 事例⑩ Pさん
 - 3-3 事例⑪ Hさん
 - 3-4 事例⑫ Bさん
- 4 「ユタ」が作られる過程 社会的ラベル付与のメカニズム
 - 4-1 キー・インフォーマントのAさんを中心に
 - 4-2 事例① Mさんを中心に
- 5 「ユタ」は肯定的な呼称？差別語？
- 6 「ユタ」は「職能・職業」であるのか？
- 7 小括

終章

議論の整理

結論

注

参考文献

本研究の射程

琉球弧の文化人類学（民俗学も含む）において、しばしば「ユタ」と称される人々についての研究は、この地域の特殊な文化として古くから耳目を集めてきた。一般的に「ユタ」は、人類学的にはシャーマンと分析されることが多く、現在でも琉球弧全域には多くの「ユタ」が活躍し、彼らを利用する人々も少なくない。さらに、これまでなされてきたユタについての研究も、膨大な数に及んでおり、それら全てについて網羅的に言及することは難しい。これらの研究は、人類学を始めとして、民俗学、宗教学、社会学、歴史学といった多方面にわたる分野から行われてきた。こうした研究領域を本論文では「ユタ研究」と呼

ぶことにしておいた。また、一般的には呪医として分析されてきた「ヤブー」についての僅かな研究も、「ユタ」ならびに「ユタ研究」に包摂されるような形で、本研究において扱うこととした。

「ユタ」という呼称は、元来は差別的なニュアンスを持つ語であり、それを行う人ないしその人が有する知識についての他人からの一種の社会的評価であり、「ユタ」本人が名乗るものでも公認された職業でもなかった。一般的にはユタとは、沖縄本島を中心に奄美諸島から先島諸島にかけて、琉球弧全域で現在においても活動を行なっている呪術的・宗教的・巫者的職能者と理解されている。その職能者は、「ユタ」という総称で広く知られているが、その呼称は蔑称ともなっているため（東 2018 : 201 ; 塩月 2012 : 58 ; 浜崎 2011 : 12 ; 桜井 1973 : 215 ; Lebra 1985 [1966] : 84)、それ以外に、カミンチュ [神に仕える人]、ムヌシリ (大橋 1998 : 20 ; 桜井 1973 : 215) ・ムヌスー (東 2018 : 57-58) [物知り]、カミングワ [カミの子] (浜崎 2011 : 14)、カミサマ [神様] (根岸 1986 : 20)、またはウグワンサー [御願者] やハンジ [判じ] (桜井 1973 : 215) などと呼ばれることもある。さらにトキ、サンジンソウ [三世相]、シムチ [書物繰り]、ヤブー (東 2018 : 57-58 ; Lebra 1985 [1966] : 92) といった類似した語も知られている。こうした人々は呪術的・宗教的・巫者的職能者として分析され (東 2018 : 23 ; 塩月 2012 : 43 ; 浜崎 2011 : 15 ; 渡邊 1990 : 23 ; 桜井 1973 : 3 ; 久場 1986 : 58)、彼らの知識は一種の専門分化した「職能」であるかのように分析されてきた。

しかしながら、こうした呼称は、一人の女性の生き方や知識についての評価にすぎず、社会構築主義的に考えれば、近代化の過程で社会的に構築されたものである。存在論的にいえば、「ユタ研究」とは、琉球弧の女性の霊威・霊力に対する信仰 (赤嶺 2019) についての知識への評価の研究であると言うことができ、一人の女性の評価に複数の解釈があってもおかしくない。つまり、ある人にとってユタである人が同時にヤブーであったり、ムヌスであったりしても問題無いはずである。それは、正確に言えば「職能」というよりも、知識に対する他人の評価といった方がよい。こうした評価が「社会的」になる過程こそが分析されるべきであろう。

文化人類学の学説史における社会進化主義、文化伝播主義、機能主義、新進化主義、構造主義、社会構築主義、現象学的人類学、存在論的人類学といった学説のパラダイムの変化も、近代化の過程とエスノグラフィックな情報の増加とに関連していると思われる。「ユタ研究」という研究領域は、こうした不思議な現象の説明の様式の変化を考えるのに適した研究領域であることを示した。従来の「ユタ研究」の主な先行研究を知識人類学の立場からレビューすることによって、本研究において評価を中心としたフィールドワークへの新たな視点を提示した。

本研究の目的

「ユタ」や「ヤブー」と称される人々は、琉球弧において宗教的世界のみならず、在来医療にも積極的に関わっている。前者の「ユタ」は、頻りに呪術的・宗教的・巫者的職能者として（東 2018 : 23 ; 塩月 2012 : 43 ; 浜崎 2011 : 15 ; 桜井 1973 : 3 ; 久場 1986 : 58）、後者の「ヤブー」は、民俗医療・民間医療職能者として分析されてきた（東 2018 : 138 ; 久場 1986 : 64 ; 山本 1995 : 50）。しかし、以上で述べたように、ある人にとってユタである人がそれと同時にヤブーであったり、ムヌスであったりしても問題ないはずである。そうすると「職能」であるかのように分析されてきた「ユタ」は、むしろ彼らの知識に対する評価と言った方が良いと考える。「ユタ」などというのは、本人が名乗るものでもなく、公認された職業でもなかったものの、今日では「職能」として固定され、意識されている。

時代の推移とともに、霊威・霊力を有すると信じられてきた女性が生きている世界も大きく変化しつつあると言うことができる。その女性の霊威・霊力に対する信仰についての知識への他人からの評価が、あらゆる手段を通してなされ、「ユタ」であるとか、「ヤブー」であるとかという社会的なラベルが付けられている。本研究の前提となる現象学的人類学の流れに位置付けられるべき知識人類学的なアプローチから見ると、その評価がどのようになされているのか、そのラベルがどのように付与されているのかというメカニズムを解明するということは、極めて重要な課題である。

その目的を達成するためには、そういった女性の生き方や彼女たちが有する知識に対する周りの人々によって評価がなされる過程を吟味した。本研究の調査地域となった鹿児島県与論島において一般の生活者が特定の人物を「ユタ」であるとか「ヤブー」であるとかとして解釈して評価をする根拠・理由に注意し、その評価基準の基礎となる話者の知識の多様性と複雑性を示すため、その要素を各々抽出した。それと同時に、同一の事柄に対して話者たちが行う評価そのものの多様性と評価をする過程に充分注意を払い、それについての記述を行なった。したがって、話者の評価対象となる人物が持つ知識を十分に把握した上で、同様に分析の対象とした。その人物を本論文において、「キー・インフォーマント」と呼ぶこととした。本研究において中心的な関心となる在来医療に関する知識への評価も配慮に入れた。それによって、周囲の人々は、それぞれ「ユタ」や「ヤブー」と称する人々を、どのような存在として捉えているのか理解することが可能となった。そうすると、「ユタ」や「ヤブー」というのは、これまで分析されてきたように「職能・職業」であるのか、それとも周囲の人々によってなされる一種の社会的評価であるのかということをも明らかにすることが可能となり、それを本研究の目的とした。

なお、「ユタ」という呼称は、蔑称ともなっているとされてきた（東 2018 : 201 ; 塩月 2012 :

58 ; 浜崎 2011 : 12 ; 桜井 1973 : 215 ; Lebra 1985 [1966] : 84)。しかし「ユタ」と称される人々自身は、それに対してどのような評価を行うのかというのは、従来の「ユタ研究」で見逃されてしまったのである。そのため、「ユタ」と呼ばれる本人からの評価も配慮に入れながら、その点についても論じた。

本研究は、現象学的に位置付けるべき研究であるため、客観的、量的な調査に基づく研究ではなく、間主観的なものである。さらに、表題に示した「在来医療治療師」という「ユタ」には含めないであろう境界的な人々にあえて焦点を当てるのは、「ユタ」が社会的に構築される過程を調査するのに適していると考えた。

調査方法

本論文では、以下のような調査を行なった。鹿児島与論島へフィールドワークを行い、現地の「ユタ」や「ヤブー」と称されるキー・インフォーマントとなる人物の友人関係のあり方、その世界観、病理観や霊魂観、なお当人物の有する知識自体といった生活全体についての情報を、参与観察を通して把握した。また、その人物に対する現地の生活者による評価や意見、その理由や根拠についての面接調査を実施した。限られた範囲ではあるが、同様な情報を現地の人々から電子メールを通して獲得した。さらに、インターネットのウェブサイトでは「ユタ」などと呼ばれる人々に対して一般の生活者によって評価がなされたり、これらについての意見が交わされたりしており、それらを考慮の範囲に追加した。しかし、調査地域となった与論島の場合は、その資料が極めて限られているということがわかった。

第1章 問題所在と研究目的

第1章では、本研究において取り入れた知識人類学的な理論の背景にある知識社会学という研究分野の創設かつ展開などについてまとめた。知識社会学は、知識人類学的な研究にかなりの影響を与え、そのヨーロッパの知識社会学に連なる問題設定は「マクロな」パースペクティブと、またアメリカの知識社会学的な理論を導入した知識人類学的な研究は「マイクロな」パースペクティブとされていることについて述べた。

次いで、研究分野としての確立までに至らなかった知識人類学的な研究に対する学者による見解を示した上で、知識人類学的な研究の現状について説明を行なった。幾人かの学者は、知識人類学の研究分野としての創設への批判の声を上げるものの、知識人類学を研究分野としてではなく、むしろ昔ながらの人類学の主たる関心事を思い出させる存在として把握する。しかし、知識論の展開が行われなかったという訳でもない。日本と西洋の幾人かの学者は、知識社会学的な知見を活用しながら、知識論を発展させたが、その結果に

について紹介した。

次に、本研究において主な関心事となる「ユタ」の発生を踏まえた上で、人類学の学説のパラダイムの流れに従って、従来の「ユタ研究」という研究領域を大まかにまとめた。知識人類学的な研究による「ユタ研究」への少ない貢献とその理由について述べながら、その研究の可能性を検討した。すなわち、従来取り上げられてこなかった一種の社会的評価としての「ユタ」というラベルを付与するメカニズムを解明する重要性を訴えた。したがって、人類学における存在論的転回という現在流行している分野の段階以前としてのこうした知識人類学的な研究の意義を考えた。さらに、使用する用語の整理をした上で、本研究の目的についての説明を行い、実施した現地調査について述べた。

第2章 先行研究による琉球弧の治療の概観

本章においては民間治療、民間医療、民俗医療、伝統的治療などと称されてきた土地独自の医療の要素とその施行者としてのユタやヤブー、あるいは他の専門家について先行研究を元にして外観を呈した。

まずユタとヤブーの資質と病理観、成立の要件、彼らの職掌分担、呼称、さらに病気診断と病気治療といった治療師としての役割について纏めた。多くの学者はヤブーを世俗的で、宗教的資質がない民間医療職能者であったり、農業の傍に治療法を身につける人々であったりするが、それらを霊的資質が備わっている異能者として見なす学者がおり、彼らの資質には男女の別による差を認める学者もいることについて紹介した。ユタの資質や病理観などに関しては、ほとんどの学者は一貫性の高い見解を示したが、彼らの土地独自の治療への関わりやそれにおける職掌領域については様々な意見が見られる。ユタを呪術的の専門家とする学者も、それと同時に鍼灸治療や薬草治療の施行者やそれに関する知識の保持者とする学者もいることがわかった。このように、ユタについても、ヤブーについても学者の見解にはかなりの差が存在することが明らかになった。

なお、ユタとヤブーならびに、琉球弧において病気対処としての様々な活動を行う他の専門家を紹介した。彼らは、ムヌス、カッティ、サンジンソウ、スムチー、さらにウグワンサーなどである。これらについても、学者によって見解がかなり異なるということが明確であり、それについて述べた。このような学者の見解における多様な不一致の理由としては、多くのその学者は、具体的な事例を提示しない提示しないものの、ヤブーなどの資質や活動などについて示唆的に論じるという点がある。また本研究において取り上げる評価の問題は、従来の研究において見逃されたということがわかった。

最終的に、多種多様な専門家によって使用されてきた瀉血、鍼、灸、指圧などを含む物理的治療、マブイグミ、呪文、祈願といった呪術的療法、また動植物、鉱産物、薬草によ

る治療について説明した。

第3章 在来医療の存続 鹿児島県与論島を中心に

本章においては、キー・インフォーマントとなる人物のライフヒストリー、病理観、霊的能力と霊的活動、霊的な事柄に関する知識、治療的知識と治療師としての活動領域、しかも彼女によるユタとヤブという呼称の使い分けを紹介した。

キー・インフォーマントの神観念の構成をなしているのは、与論島で古代から祀られてきたと推測されるジヌカミと呼ぶ土の神と祖先の神であり、当人物の病理観には、祖先の神によるお知らせと中国医学における五臓六腑という概念による影響が絡み合い、独自の考え方を構成している。さらに、キー・インフォーマントは、これまでユタの活動としてよく把握されてきたマブイ寄せや祖先供養ができたり、依頼者が感じる症状をそのまま受けたりする能力を持ち。キー・インフォーマント自身は、自分がサービ・マートゥイという与論島における偉大な英雄として扱われる人物の生まれ変わりであると信じるということがわかった。

キー・インフォーマントの治療的知識については、単に代々伝承されてきた知識であるとは決して言えず、その知識に含まれているのは、家族や島の治療師であったり、学者や医療の専門家であったり、自分自身の経験や様々な書物であったりその知識源が多岐にわたっていることが明らかになった。キー・インフォーマントの有する知識の多様性と複雑性を示すため、その要素を各々抽出し、説明することを試みた。

キー・インフォーマントは、自分の知識を活用しながら、病気診断とその治療に当たったり、霊的な事柄や人生に関する相談を受けたりするが、自分自身のことを何らかのカテゴリーには当てはめることはなく、ユタといった特定のラベルを自分に対しては使用しないことがわかった。時には、自分が様々な知識の担い手としてのユタ「に近いかな」と発言したり、「ユタとかそういうのじゃない」と否定したり、一貫生のない見解を示し、筆者はそれについてできる限り精密に述べた。だが、フィールドワークを通して、キー・インフォーマントの知識、資質、あるいは生き方などは、周囲の人々による評価の対象とされることがよくあるということが理解できた。

第4章 「ユタ」・「ヤブ」の「作り方」

第4章では、事例を参照しながら、キー・インフォーマントともう一人の話者に対して周囲の人々によってどのような評価が加えられているのかを紹介した。そのメカニズムについては、話者が自分の知識のどのように正当化したり、どのような知識の権威を借りて評価をしたりといったことについての検討を試みた。それと同時に、その評価の基準となる話者の知識は、どのような要素から成り立っているのかを示すため、それぞれを抽出し、その由来などに関して説明を与えた。また、同一の事柄に対する評価や意見が話者によって異なる場合、それにも十分に注意を払い、指摘した。したがって、話者はどのような関

係で結ばれているのか、その関係が彼らによる評価に何らかの影響を及ぼすのかについて考慮した。評価の結果としての「ユタ」や「ヤブ」という呼称を話者がどのように使い分けているのかを、それぞれの事例において示した。

以上を踏まえて、事例検討から見出すことができたあらゆる評価のメカニズムを羅列しながら、その説明を試みた。さらに、周囲の人々からの評価とその評価対象となる話者による自己評価両方の立場を検討しながら、差別語としての「ユタ」という呼称に含まれる意味合いについて考察を行った。その上で、「ユタ」は、従来公認された「職業」や「職能」であるかのように分析されてきたが、果たしてそうであるのかということについて、「ユタ」と呼ばれる話者に焦点を当て、その発言を参照しながら、検討を試みた。

結論

本論文において知識人類学的なアプローチを取り入れることによって、琉球弧の女性の特異的な霊威・霊力に対する信仰についての知識や能力、あるいはこれらの生き方への一種の社会的評価としての「ユタ」について分析を行った。そのために特定の個人に対する周囲の人々による評価に焦点を当て、その評価基準となる彼らの知識を抽出した上で、評価自体とその結果としての「ユタ」といったラベル付与のメカニズムを可能な限り明らかにした。

よって、そのメカニズムを念頭に起きながら、差別語として「ユタ」を検討した。そのために、特定の個人に対する周囲の人々による評価とその評価対象となる本人自体は、それをいかに受け取るのかというところに十分に注意を払った。その結果、「ユタ」という呼称を肯定的な意味合を込めたものとして使用する人々がいるが、その信者は、現在においても頻繁に揶揄したり、批判したり、軽蔑視したりされるように、ユタをめぐる信仰に関わる島民が劣った存在として扱われることがある。次いで、ユタと称される人物にもその影響が大きく現れ、当人の自己評価とは相互に相容れないものであり、様々な行動制限などを引き起こす要因である。その評価を行う周囲の人々の意図・無意図を問わず、「ユタ」というのは、肯定的な意味合を込めたラベルとは決して言えず、むしろ一種の差別用語であるという結論になった。

したがって、「職能・職業」としての「ユタ」について考察を行った。その際に、同様に周囲の人々の見解と彼らの評価対象となった特定の個人の見解を配慮に入れ、分析を行った。周囲の人々には、ユタを職能・職業として見なす人々とそうしない人々もいる。ユタと称される本人自体は、決してその霊的活動を職業とはしないということが明らかである。それだけではなく、こうした活動を商売として扱う人々に対して批判的な態度を強く表すのである。さらに、「ユタ」といったラベルは、そのように称される本人自身が有するものの味方・考え方、あるいは仕事上の倫理価値などと反したものであったりすることもある。しかも、そのラベルは、客観的な評価基準を元にして付与される訳ではもちろんなく、あくまでも主観的な評価に過ぎないものであるという結果になった。それに加えて、このよ

うな主観的な評価を行う人々は、ユタとしての特定の個人に対する意見を周りの人々と交わすことを考えると、ユタが感主観的なものとして「作られて」いくとも言うことができる。そうすると、従来「職能・職業」として述べられてきた「ユタ」は、一種の社会的評価として捉えなされるべきであると考ええる。

参考文献

Anon. (2006a) 『与論島薬草一覧』 与論薬草薬膳研究所、与論島。

Anon. (2006b) 『与論島で薬草（茶）として飲用されてきた草花一覧表』 うんぱるゆがぷーグループ、与論島。

青木孝志 (1999) 「掌蹠膿疱症に対する EQR 療法についての 1 症例とその電気インピーダンスの変化」『日本鍼灸良導絡医学会』 27 (1) : 1-8。

赤嶺政信 (2019) 「男系原理と女性の霊威」『沖縄ジェンダー学 1 「伝統」へのアプローチ』 喜納育江編、35-55、大月書店、東京。

明石謙 (1983) 「治療体操」『リハビリテーション医学』 20 (1) : 63-66。

東資子 (2018) 『治癒と物語—南西諸島の民俗医療』 森話社、東京。

荒井優 (2017) 「日本人の霊魂感～団子はなぜ丸い～」『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要第』 74 : 15-28。

石塚尊俊 (1990) 「憑きものと社会」『憑きもの』 谷川健一編、三一書房、東京。

伊藤泰信 (2000) 「知の状況依存性について：知識人類学試論」『社会人類学年』 26 : 97-127、東京。

稲村務 (2016) 「柳田国男の「常民」概念についての資料的再検討—「日本文化の伝統について」『近代文学』および「常民婚姻史料」「耳で聞いた話」『人情地理』—」『人間科学』 35 : 1-82、沖縄。

稲村務（2017a）「「伝承／伝統的知識」概念構築のために—民俗、フォークロア、常民—」
『人間科学』36：105-144、沖縄。

稲村務（2017b）「民族学者・柳田国男—座談会「民俗学の過去と将来」（1948）を中心に—」
『人間科学』37：189-260、沖縄。

池田豪憲（1988）「陸の植物」『与論町誌』与論町誌編集委員会編、15-36、南日本新聞開発センター、鹿児島。

伊波普猷（1974）『古琉球』平凡社、東京。

伊波普猷（2014）[1913]『ユタの歴史的研究』青空文庫、東京。

石井かほる、吉川 周平、合田 成男、高橋 秀雄（2000）「舞踊における芸術と芸能」『舞踊学』2：5-7。

岩本通弥（1998）「『民俗』を対象とするから民俗学なのか：なぜ民俗学は『近代』を扱えなくなってしまったのか」『日本民俗学』215：17-33。

岡本恵昭（1976）「沖縄の民間療法」『九州・沖縄の民間療法』佐々木哲哉編、335-377、明玄書房、東京。

大橋英寿（1998）『シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂、東京。

小園公雄（1988）「与論の近世社会」『与論町誌』与論町誌編集委員会編、172-271、南日本新聞開発センター、鹿児島。

小田亮（1987）「沖縄の『門中化』と知識の不均衡配分—沖縄本島北部・塩屋の事例考察」
『民族学研究』51：344-374、東京。

折口信夫（1955a）『折口信夫全集第2巻』中央公論社、東京。

折口信夫（1955b）『折口信夫全集第15巻』中央公論社、東京。

折口信夫（1956）『折口信夫全集第 20 巻』中央公論社、東京。

河野貴美子、石継明、段立葉（1996）「気功及び瞑想中脳波の α 波周波数変化と θ 波」『国際生命情報科学会誌』14（1）：22-32。

喜多村正（2008）「ウヤファーフジ」『沖縄民俗辞典』渡邊欣雄等編、69、吉川弘文館、東京。

喜山荘一（2015）『珊瑚礁の思考（琉球弧から太平洋へ）』藤原書店、東京。

久場政彦（1986）「沖縄社会における民間医療職能者の特質—ヤブーを中心にして—」『沖縄文化』23：55-69、沖縄。

久保明教（2016）「方法論的独他論の現在—否定形の関係論に向けて」『現代思想』44（5）：190-201、東京。

黒木賢一（2011）「中医心理学の視座」『大阪経大論集』61（4）：21-37。

小池誠（1991）「知識の社会人類学」『社会人類学年報』16：193-208、東京。

小林貴幸（2008）「沖縄武術」『沖縄民俗辞典』渡邊欣雄等編、98-99、吉川弘文館、東京。

古谷野洋子（2011）「八重山の念仏者（ニンブチャー）、その受容と葬送の変容：波照間島のサイシの事例を中心に」『比較民俗研究』25：91-112。

近藤功行（2003）「与論島における死生観と終末行動をめぐる人類生態学的研究」『志學館大学特別研究成果報告書』、181-201。

近藤功行（2008a）「鍼灸」『沖縄民俗辞典』渡邊欣雄等編、272、吉川弘文館、東京。

近藤功行（2008b）「ヤブー」『沖縄民俗辞典』渡邊欣雄等編、528、吉川弘文館、東京。

酒井卯作（2002）『琉球列島民俗語彙』第一書房、東京。

栄喜久元（1988a）「そのたの諸祝祭」『与論町誌』与論町誌編集委員会編、1141-1149、南日本新聞開発センター、鹿児島。

栄喜久元（1988b）「民間説話」『与論町誌』与論町誌編集委員会編、1196-1226、南日本新聞開発センター、鹿児島。

佐喜眞興英（1925）『シマの話』郷土研究社、東京。

桜井徳太郎（1973）『沖縄のシャマニズム 民間巫女の生態と機能』弘文堂、東京。

桜井徳太郎（1979）「沖縄民俗宗教の核—祝女（ノロ）イズムと巫女（ユタ）イズム」『沖縄文化研究』6：107-147、東京。

桜井徳太郎（1984）「南西諸島シャマニズムの源流」『日本のシャマニズムとその周辺』加藤九祚編、89-121、日本放送出版協会、東京。

佐々木宏幹（1984a）『シャーマニズムの人類学』弘文堂、東京。

佐々木宏幹（1984b）「脱魂型と憑依型」『日本のシャマニズムとその周辺』加藤九祚編、482-484、日本放送出版協会、東京。

佐々木伸一（2008）「ムヌシリ」『沖縄民俗辞典』渡邊欣雄等編、504-505、吉川弘文館、東京。

佐々木雄司編（1984）『沖縄の文化と精神衛星』弘文堂、東京。

先田光演（1989）『沖永良部島のユタ』海風社、沖縄。

塩月亮子（2012）『沖縄シャーマニズムの近代—聖なる狂気のゆくえ』森話社、東京。

下野敏見（1986）「南西諸島の海神信仰」『国立民族学博物館研究報告別冊』3：99-126。

- 下川友子 (2014) 『富士山 幸せパワースポット巡り』ブックウォーカー、東京。
- 白石哲郎 (2017) 「ドイツ社会学における文化概念の再検討」『佛教大学大学院紀要』45 : 85-102、京都。
- 藤山正二郎 (2008) 「原因の不在—伝統医学の病因論—」『福岡県立大学人間社会学部紀要』16 (2) : 29-41。
- 高野洋志 (1990) 「伊平屋島田名の祭祀空間」『岡山理科大学紀要』26 : 157-170。
- 高野千石 (1984) 「「気」の概念について生体物性論の立場からの解釈」『日本良導絡自律神経雑誌』29 卷 3-4 号 : 71-73。
- 高良倉吉 (1989) 『琉球王国史の課題』ひるぎ社、沖縄。
- 滝口直子 (1991) 『宮古島のシャーマンの世界—シャーマニズムと民間心理療法』名著出版、大阪。
- 竹之内診佐夫、山下九三夫 (1979) 「陰陽・五行について」『日本良導絡自律神経雑誌』24 (12) : 312-321。
- 多和田真淳 (1972) 「第七章 民間療法」『沖縄県史』各編、22 : 845-901、琉球政府、沖縄。
- 多和田真淳、大田 文子 (1985) 『沖縄の薬草百科 : 誰にでもできる薬草の利用法 : やさしい煎じ方と飲み方』新星図書、那覇。
- 寺石悦章 (2009a) 「現代日本におけるパワーストーン (1) —パワーストーンの2つの世界—」『四日市大学総合政策学部論集』8 : 1-24。
- 寺石悦章 (2009b) 「現代日本におけるパワーストーン (2) —なぜクリスタルは特別なのか—」『四日市大学総合政策学部論集』8 : 25-44。
- 谷川ゆに (2018) 『「あの世」と「この世」のあいだ—たましいのふるさとを探して—』新潮社、

東京。

徳永恂（1976）「序論」『社会学講座 11 知識社会学』徳永恂編、17-43、東京。

中田福市、中田貴久子（1990）『これでわかる薬用植物』新星図書、那覇。

波平恵美子（1984）『病気と治療の文化人類学』海鳴社、東京。

波平恵美子（2002）「身体・病気・治療」『文化人類学』波平恵美子編、184-217、医学書院、東京。

新村出編（2018）『広辞苑』岩波書店、東京。

日本民族学協会編（2009）『日本社会民俗辞典第3巻 つ〜ほ』日本図書センター、東京。

日本AST協会編（2005）『気功治療』星雲社、東京。

根岸謙之助（1986）「民間信仰の医療民俗学的考察」『群大医短紀要』7：9-25。

野口才蔵（1988a）「年中行事」『与論町誌』与論町誌編集委員会編、1077-1088、南日本新聞開発センター、鹿児島。

野口才蔵（1988b）「信仰（宗教）、古跡・遺物、名所」『与論町誌』与論町誌編集委員会編、1226-1268、南日本新聞開発センター、鹿児島。

木戸伸栄（2015）「与論島の植物」『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』33（4）：59-75、鹿児島国際大学。

浜崎盛康編（2011）『ユタとスピリチュアルケア 沖縄の民間信仰とスピリチュアルな現実をめぐって』ポーターインク、沖縄。

浜田明範（2018）「存在論的転回とエスノグラフィー—具体的なものの喚起力について」『立命館生存学研究』1：21-31、京都。

掘茂、黒野保三（1984）「四分画と脈診の対応に関する客観的考察」『全日本鍼灸学会雑誌』
33（4）：420-426。

本田泰弘、津田彰、鄧科、堀内聡（2010）「鍼灸医学的メンタルヘルス診断としての頸部経
絡テストの有用性」『久留米大学心理学研究』9：69-76、久留米。

林美枝子（2008）「沖縄における伝統的民俗医療資源の研究—瀉血・吸血に関する考察」『北
海道民族学』4：16-30。

林美枝子（2009）「補完・代替される医療の現在—CAM による通常医療の相対化について」
『現代社会研究』22：8-11。

平敷令治（2008）「ビジュアル」『沖縄民俗辞典』渡邊欣雄等編、439-440、吉川弘文館、東京。

フォスター、G. M. & アンダーソン、B. G. （1978 [1987]）『医療人類学』中川米造監訳、
リプロボート、東京。

町泰樹（2012）「鹿児島県与論島における洗骨の規範化とその不成立：「火葬場必要論」と民
族知識の在り方をめぐって」『九州人類学会報』39：19-36、九州人類学研究会。

町泰樹（2019）「国民国家形成期における民俗信仰と葬制の変容：鹿児島県与論島の事例か
ら」『地域政策科学研究』16：145-161。

馬淵東一（1974）『馬淵東一著作集第一巻』社会思想社、東京。

宮菌夏美（2005）「与論島のヘルスケアシステムに関する医療人類学的研究—与論島のヘル
スケアシステム—」『南太平洋海域調査研究報告=occasional papers』42：39-49。

宮菌夏美（2006）「与論島の民俗医療システムに関する医療人類学的研究—知の財産として
の高齢者—」『南太平洋海域調査研究報告=occasional papers』46：95-106。

森幸一（2008）「ユタ」『沖縄民俗辞典』渡邊欣雄等編、537-540、吉川弘文館、東京。

盛下真優子 (2017) 「知と人間形成—M. シューラーの知識社会学における人間形成論的考察—」『教育思想』44 : 55-70、仙台。

山田実 (1984) 『与論島の生活と伝承』桜楓社、東京。

山田実 (1988) 「シニグ祭」『与論町誌』与論町誌編集委員会編、1121-1141、南日本新聞開発センター、鹿児島。

山本芳美 (1995) 「沖縄八重山地方におけるイレズミ研究—婚姻と民間治療の側面から」『政治学研究論集』2 : 41-63。

山下欣一 (1977) 『奄美のシャーマニズム』弘文堂、東京。

矢山利彦 (1995) 「気の発想による治療及び客観的指標について」『日本良導絡自律神経学会雑誌』40 (3) : 65-71。

山本芳美 (1995) 「沖縄八重山地方におけるイレズミ研究—婚姻と民間治療の側面から」『政治学研究論集』2 : 41-63。

吉川敏男 (1999) 『薬草と漢方のすすめ』ニライ社、那覇。

吉田正紀 (2000) 『民俗医療の人類学—東南アジアの医療システム』古今書院、東京。

若杉安希乃 (2014) 「目は口ほどにものをいう：漢方医学における眼が語る病態」『ファルマシア』50 卷3号 : 235-239。

渡邊欣雄 (1985) 『沖縄の社会組織と世界観』新泉社、東京。

渡邊欣雄 (1990) 『民俗知識論の課題—沖縄の知識人類学—』凱風社、東京。

王貞月 (2011) 『台湾シャーマニズムの民俗医療メカニズム』中国書店、福岡。

- Bala Deva (2013) *Living Light Language: Creation speaks...* iUniverse, Indiana.
- Barnes, Linda L. (2005) *Needles, Herbs, Gods, and Ghosts: China, Healing, and the West to 1848*. Harvard University Press, Cambridge.
- Berger, Peter L. [&] Luckmann, Thomas (1983) *Spółeczne tworzenie rzeczywistości*. Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa.
- Borofsky, Robert (1994) On the Knowledge and Knowing of Cultural Activities. *Assessing Cultural Anthropology*. Robert Borofsky (ed), 331-348, New York.
- Borofsky, Robert (2019) *An Anthropology of Anthropology: Is It Time to Shift Paradigms?* Center for a Public Anthropology, New York.
- Boyer, Dominic (2005) Visiting Knowledge in Anthropology: An Introduction. *Ethnos* 70 (2): 141- 148.
- Bradshaw, Josh (1990) *Homecoming: Reclaiming and Championing Your Inner Child*. Bantam, New York.
- Bruyere, Rosalyn (1994) *Wheels of Light: Chakras, Auras, and the Healing Energy of the Body*. Atria Books, New York.
- Burszta, Józef (1967) Lecznictwo ludowe. *Kultura ludowa Wielkopolski* 3 : 394-436.
- Cohen, Emma (2010) Anthropology of Knowledge. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 16: 193-202, Hoboken.
- Coleman, Simon (2010) Recent Developments in the Anthropology of Religion. *The Black Companion to Sociology of Religion*. Bryan S. Turner (ed), 103-121, Blackwell Publishing, Singapore.
- Crick, Malcolm R. (1982) Anthropology of Knowledge. *Annual Review of Anthropology* 11: 287-313, Palo Alto.
- Eliade, Mircea (2011) *Szamanizm i archaiczne techniki ekstazy*. Aletheia, Warszawa.

- Foster, George M. (1976) Disease Etiologies in Non-Western Medical Systems. *American Anthropologist* 78 (4): 773-782.
- Fridman, Eva Jane Neumann [&] Walter, Mariko Namba (2004) *Shamanism: An Encyclopedia of World Beliefs, Practices, and Culture*. ABC-CLIO, Santa Barbara.
- Hara Tomoaki (2007) Okinawan Studies in Japan, 1879-2007. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 8: 101-136, Tokyo.
- Henare, Amiria, Martin Holbraad [&] Sari Wastell (2007) *Thinking Through Things: Theorising Artefacts Ethnographically*. Routledge, Abingdon.
- Heywood, Paolo (2012) Anthropology and What There Is: Reflections on 'Ontology'. *The Cambridge Journal of Anthropology* 30 (1): 143-151, Brooklyn.
- Heywood, Paolo (2017) The ontological turn. *The Cambridge Encyclopedia of Anthropology*. Access: <http://doi.org/10.29164/17ontology>
- Holbraad, Martin (2012) *Truth in motion: the recursive anthropology of Cuban divination*. University Press, Chicago.
- Holbraad, Martin [&] Morten Axel Pedersen (2017) *The Ontological Turn: An Anthropological Exposition*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Jensen, Casper Bruun [&] Atsuro Morita (2012) Anthropology as critique of reality: A Japanese turn. *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 2 (2): 358-370.
- Joralemon, Donald (2017 [2006]) *Exploring Medical Anthropology*. Routledge, New York.
- Kelly, Ann H., Frédéric Keck, Christos Lynteris (2019) *The Anthropology of Epidemics*. Routledge, New York.
- Lebra, William P. (1985) [1966] *Okinawan Religion. Belief, Ritual, and Social Structure*. University of Hawaii Press, Hawaii.

- Mannheim, Karl (1992) *Ideologia i utopia*. Wydawnictwo Test, Lublin.
- McClellan, Stuart (2005) 'The illness is part of the person': discourses of blame, individual responsibility and individuation at a centre for spiritual healing in the North of England. *Sociology of Health & Illness* 27 (5): 628-648.
- McGuire, Kathleen (1993) Focusing inner child work with abused clients. *Focusing Folio*, 12 (2) : 17-33.
- Miłkowski, Marcin (2001) Klasyczna socjologia wiedzy a realizm teoriopoznawczy. *Oblicza relatywizmu teoriopoznawczego*. Tadeusz Ciecierski (ed), 43-56, Warszawa.
- Needham, Joseph (2004) *Science and Civilisation in China, Volume 6, Biology and Biological Technology, Part IV: Medicine*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Niżnik, Józef (1989) *Socjologia wiedzy. Zarys historii i problematyki*. Książka i Wiedza, Warszawa.
- Pelissier, Catherine (1991) The Anthropology of Teaching and Learning. *Annual Review of Anthropology* 20: 75-95, Palo Alto.
- Sasaki Yuji [&] Yoshinaga Mari (1993) Kamidari as a Key Concept of Okinawan Shamanism. *Shaman* 1 (Spring/Autumn), 105-120.
- Scheler, Max (1975) Formalne problemy socjologii wiedzy. *Elementy teorii socjologicznych* 2: 627-643, Warszawa.
- Scheler, Max (1990) *Problemy socjologii wiedzy*. Państwowe Wydawnictwo Naukowe, Warszawa.
- Szyjewski, Andrzej (2005) *Szamanizm*. Wydawnictwo WAM, Kraków.
- Wang Lianying (2000) 「On Souls and Ghosts」 『心理学研究』 5 (1) : 11-16.